

東洋興業会長 松倉久幸さんの 浅草六区芸能伝

【第66幕】

前号でのお約束通り、今月・来月は特別企画。江戸川大学の西条昇教授に筆をお預けし、地味ながらも異彩を放った珠玉の浅草芸人らについて書いて頂きます。

前編は、西条教授が少年時代にファンレターを書くほど心惹かれたという、石田英二についてのお話です。

*

僕は小学生になってすぐに父親と浅草松竹演芸場へデン助劇団を観に行くようになり、10歳前後からは日比谷や新宿の劇場での喜劇の舞台にも一人で通っていた。当初のお目当ては森繁久彌、三木のり平、由利徹といった人たちが、そのうちに脇役で出てくる一人の中年役者のことが無性に好きになった。のり平や由利のような強烈なアチャカラ芸がある訳ではない。達者で自然な演技をしていたかと思えば、要所要所では確実に笑いを取ってみせ、暗転のオチを任されることもあった。



石田英二

出番はそれほど多くないが、そのおじさんが出てくると途端に舞台が生き生きとして、観ていて何だか楽しくなってくるのだ。それまでテレビで観たことがなかったのでプログラムの配役表で名前を確認すると、そこには石田英二と書かれていた。

石田の舞台で、とりわけ印象に残るのが、昭和53年12月の日劇での『雲の上団五郎一座』の劇中劇『弁天小僧女白浪』である。同35年12月の『雲の上団五郎一座』公演での八波おと志の蝙蝠安がのり平の与三郎にお富さんへのゆすり方を伝授する劇中劇『与話情浮名横櫛』（僕は映画版でしか観ていないが……）同様のパターンで、武家娘に扮した弁天小僧菊之助役の南利明と供姿の南郷丸役の石田が浜松屋へのゆすり方のリハーサルを始める。石田は、予め用意した緋色の絞り染めをキョロキョロしながら懐に入れて万引きしたよう



【今回の執筆者】

西条昇 江戸川大学メディアコミュニケーション学部マス・コミュニケーション学科教授。大衆芸能史研究者、お笑い評論家、構成作家。メディアへの出演、新聞等への執筆、著書多数。

に見せるやり方、店の者に算盤で殴られた時の倒れ方、店の用心棒になりすました仲間の日本駄右衛門に「男であろう」と言われた時の啖呵と尻のまくり方、足の組み方を「こつやるんだ、やってみる」と自ら見本を見せるが、南はこことこ上手く出来ずにボケを連発。「じゃあ、俺が横で合図を送ってやるから」と、石田が「頭に両手を当てたら布を出す」「右手を胸に当てたら万引きしたように懐に入れる」といった段取りをいちいち決めて店に向かうものの、店は大旦那が死んで3年めの供養のために「今日だけは万引きも見て見ぬふりをするように」とのこと、南が万引きしたように見せても誰も見とがめてくれない。石田は大番頭役の佐山俊二らに「こいつがせっかく万引きしたのを店の者が誰もとがめないのは一体どういう訳だ」と迫り、しまいには「俺たち反物買うから、頼むから万引き見つけてくれよ」と泣きつく始末。合図の段取りも全て空回りした末に「浜松屋は隣りです」…。

石田のツッコミは八波ほど強烈ではないが、的確さではひけをとらず、両膝に当てた三里紙を南に「何だい、兄貴は…足にマスクし



昭和53年12月、日劇『雲の上団五郎一座』の劇中劇『弁天小僧』。左より石田英二、南利明、佐山俊二。

て」といじられた時のリアクションも面白かった。その後も石田の舞台を追いかけ続け、昭和63年12月に『花王名人劇場』の収録のために浅草・常盤座上演された『爆笑コメディ大忠臣蔵』が、僕の観た最後の石田の舞台となった。以前と比べて頬のこけた石田は山崎街道の場で、かつて佐山が演じた与市兵衛に扮して定九郎役の由利の相手を務めていたが、どこか往年の精気が感じられなかった。平成3年1月26日に62歳で亡くなったことを知ったのは、しばらく経ってからのことである。

その頃にはテレビ台本や雑誌の原稿を書くようになっていた僕は、石田について調べ始め、関係者の方々に話を聞いてまわった。

本名は石田義昭。昭和2年1月13日、大阪市港区で生まれた。京都の新劇養成所や映画プロデューサーのマキノ光雄が主宰の芸能学校を経て、大阪・天王寺のストリップ劇場のコメディアンとなり、同29年に上京。浅草・公園劇場や江東、ハリ座に出演後、東洋興業の専属に。新宿フランズ座へ配属され、石田映二の芸名で石井均や三波伸介と芸の火花を散らし合う。当時、観客の一人として舞台を観ていた伊東四朗は僕に「その場で、わっと笑わせる石井さんに対して、石田さんは0コマ何秒か遅れて笑っちゃうような考えオチみたいなのがありましたね」と語ってくれた。

昭和34年11月には軽演劇の殿堂を目指した浅草・東洋劇

場のこけら落とし公演『ずべ公天使』で石田は黒雲会会長の黒川親分役を演じて注目を集めている。翌36年3月に再演された同作品を東洋劇場の研究生として舞台袖から観ていた萩本欽一に聞いたところでは、組の解散式の場面で石田は痰のつまった親分になって、周囲の子分たちに「おめえたちとも、クウワッ」と言っ



昭和35年3月、東洋劇場『ずべ公天使』で黒川親分を演じる石田英二（左から5人め）。左から2人めが前田通子、3人めが炎加世子。

て絡んだ痰をティッシュに出しては、「お別れだい」で胸に入れ、「あとのことは俺に任せとけ」と言って胸を叩いてしまい、ティッシュの痰がちよっと出ちゃった気持ち悪さと子分たちとの別れの悲しさの両方を表現する演技が絶品だったという。その後も石田は池信一、東八郎との「丁稚トリオ」として、東洋劇場に欠かせない存在となった。一方で、舞台裏での石田はとにかく酒乱と言っているほど酒癖が悪く、しょっちゅう誰かと殴り合いの喧嘩をしていたようだ。

昭和38年12月、そんな石田に東京宝塚劇場での『雲の上

』、財津一郎の「チョーダイ」「ヒッジョーにキビシッ」のような決めフレーズを石田は持っておらず、トニー谷の受け役に徹していたから、これでテレビ出演が増えることはなかった。

東宝の舞台では森繁やのリ平にその実力を買われ、森繁が主演のミュージカル『屋根の上のヴァイオリン弾き』での居酒屋の主人役で好評を得たこともあった。芸名の映二の字を英二に変えたのも、その頃のことだ。しかし、やがて日劇や新宿コマ劇場での由利が座長の公演くらいでしか石田の姿を見かけることがなくなっていた。その背景には、やはり、酒癖の悪さがあつたらしく、ある喜劇人は「森繁さんを殴っちゃったらしいよ」と幕内での噂を教えてくれた。

何が石田をそこまで酒に走らせたのか。芸に対する自負と知名度の低さに起因する扱ひとのバランスを取ることが難しくなっていたのだろうか。一度、その心の中をじっくりと聞いてみたかった。

かつて、僕が小学生から中学生になる頃に出したファンレターに対して石田がくれた返事の葉書には「君のような若いファンがいるとは知りませんでした。僕のような地味な演技を評価してくれてありがと」と書かれていた。今、また、石田への46年ぶりのファンレターのつもりで、この一文を書いてみた。

（執筆・写真提供／西条昇）

団五郎一座ブロードウェイへ行く』への出演という大きなチャンスが訪れる。東洋興業の舞台から菊田一夫が作・演出を務める東宝喜劇の舞台への進出は、八波に次ぐ浅草喜劇人にとつての大出世と言えた。ただ、当時の八波がすでに「脱線トリオ」の一員としてテレビで売っていたのに対して石田は世間的には無名に近い分、看板の序列は高くなかった。それでも榎本健一、森川信、堺駿一、八波ら錚々たる顔触れの中で存在感を示し、翌39年の『雲の上団五郎一座故郷へ行く』にも呼ばれるなど、東宝の大劇場の常連者になっていく。

昭和40年になると、テレビの演芸番組を中心に三波の率いる「てんぶくトリオ」や東の率いる「トリオ・スカイライン」らによる「トリオ・ブーム」が巻き起こった。売れているトリオのメンバーの大半は東洋興業の出身者だった。酒癖の悪い石田をメンバーに誘う仲間は居らず、ストリップ出身の空ひばりと男女コンビを組み、進駐軍とパンパン・ガールなどのコントを売り物にしたが、ブームには乗れないまま、三波や東に知名度で大きく差をつけられてしまう。

昭和43年には、驚異的な視聴率を誇った朝日放送の人気コメディ番組『てなもんや三度笠』の最終シリーズに、トニー谷の扮する見世物師の四ツ目屋東十郎の子分である助六役でレギュラー出演を果たすも、同番組出演をきっかけに人気がブレイクしたルーキー新一の「イヤーン、イヤー